

『メディア不信』

2018年02月12日

最近の億万長者にリストアップされているのは情報関係の企業者が多いようである。人々は、それだけ情報を得ることに熱心であるということであろう。メディアは、新聞、ラジオ、テレビが主なものであった。最近はそれに、インターネットが圧倒的に加わって来た。更に、ソーシャルメディアと言われる、情報を互に交換し合う機能が広範囲に広がり、メディア業界は花盛りである。

ガラパゴス諸島は古の動物が生息する島で、これになぞらえ、パソコンやスマホが苦手な人を「ガラ携」というそうだが、私は全く「ガラ携」である。必要最小限度のことしか知らず、分からない時は、専門家に教えてもらっている。だから、フェイスブックなどは利用していない。応答することが大儀で、情報を受けることは避け、必要に応じて求めるようにしている。ネットはしばしば利用している。事実確認には便利であるが、価値判断を要する事案に関しては、疑問点もあり、眉に唾をつけて読んでいる。私の情報源は自分で選んだ新聞、テレビ、雑誌、書籍などである。

林里香氏の『メディア不信』を読んで、メディアが人々と国のあり方に関し、計り知れない影響を与えている現実を改めて知らされ、恐怖にも感じた。メディアは起こっている出来事の事実を人々に知らせ、暴走しがちな国家権力を監視することが使命である。そのメディアが「不信」の中にいるということが多岐にわたって分析、報告している。

「ポスト真実」という言葉がオックスフォード辞典に、2016年の「今年の単語」に選ばれた。米大統領ドナルド・トランプ氏はツイッターを駆使しているが、メディアに批判されるのが嫌いなようで、それらを「フェイクニュース（ウソ情報）」だと言い張る。ところが、彼の発信には、1年で2,140ものウソがあるとの報道もある。真実とウソを見分けるのは至難な時代になったということである。

林氏は、他の国々と日本のメディアを比較、検討している。国はそれぞれ文化的背景が違うから、自ずとメディアのあり方も違うのは当然である。日本では、他の36ヶ国と比べ、ユーザーはメディアやネットの報道にさほど関心がなく、他人事のように考えている様子が窺える。「最近、積極的にニュースを避けようとしたことがありますか」という質問に、「しばしば」「ひんぱんに」と答えた人は6%に留まり、36ヶ国中最低であった。この数字から、メディアや報道に無関心で、他人事と考えている日本人像が見えるという。林氏は、メディアを自分たちのものとしなない社会は、「言論・表現の自由」が憲法で保障され、選挙制度が整備されていても、土台となる知識が、誰によってどこで作られているかという意識を持たなければ、民主主義は形骸化すると警告している。確かに、送られて来る情報を聞くだけで、メディアに主体的に関わることはしていない。メディアも私たちのものだという認識が大切だと教えられた。

ソーシャルメディアを媒介して、韓国では民主化、アメリカではオバマ大統領を生み出したと聞いた。時代を変革する力を持っているということである。反面、好みのメディアだけに集中し、他の一切を拒絶する風潮があり、互いの意見交換をできなくしている状況もある。それが、分断と亀裂を深刻にしている。そこに「メディア不信」の根があるのではないか。メディアのあり方に正しい一つの答えがある訳ではない。特定のメディアを名指しで批判し、「メディア不要論」が高まった時、そこで生じた「メディア不信」を語り合い、問題を検証して、否定的な不信から、民主主義を構築するためのメディアへと転化させる、忍耐強い作業が必要であると、林氏は訴えている。聞くべき主張ではないか。